

## 第七章 松ノ木式土器の提唱とその意義

松ノ木式土器は、南四国における成立期の縁帯文土器様式として一時期を画するものであり、既存の編年体系の中に新たに独立した一型式として位置付けることができる。松ノ木式土器成立の背景には、西日本から一部関東にかけて生起した縄文後期土器の器種分化、有文深鉢の口縁部と胴部文様の独立という新たな動向があることは言うまでもない。縁帯文土器の成立は、先行型式と縁帯文土器、更に後続型式との序列をめぐって、あるいは関東との時間的な併行関係を如何に理解するのかと言う問題を内包している。また著しい器種の分化や新たに登場する石器の存在等は、縄文後期前葉の社会的変化に照応した動向として理解しなければならない。ここでは四国を中心とする松ノ木式土器の分布や、上・内面施文と外面施文に示される成立期の縁帯文土器と後続型式の問題、縁帯文土器の成立と関東との関係などについて若干の考察を行うものである。

四国において松ノ木式土器の類似相にいち早く着目し、独立した型式名を付したのは犬養徹夫氏であった。犬養氏は、小松川遺跡出土の土器の分析を通して独立した土器型として小松川式土器を設定し、その編年的位置を「六軒家Ⅰ式（中津式土器）と六軒家式土器（福田Ⅱ式土器）との中間に位置」付けた<sup>(5)</sup>。しかしながら小松川式に特徴的な有文深鉢の肥厚した口縁部の沈線（上面施文型）や波頂部から直接的に垂下する沈線、胴部外面に施される顕著な条痕調整などは、宿毛式や福田Ⅱ式を経ないと出現し得ない文様意匠であり、松ノ木式と共通する要素が多く見られる。と同時に、犬養氏が提示された資料中にはポジティブな磨り消し縄文を有する土器が比較的多く見られ、更に松ノ木式でⅢ類とした土器も存在している。このような特徴は成立期の縁帯文土器よりも古い要素であり、松ノ木式と宿毛式あるいは福田Ⅱ式をつなぐステージとして編年的な位置付けを考えなければならない。今一つ小松川式土器で注目すべきことは、上面施文型の口縁と外面施文型の口縁部を有する有文深鉢が共存しているという事実である。松ノ木式以前の段階に外面施文型の口縁部と上面施文型の口縁部を有する有文深鉢が共存していることは、後述する縁帯文土器の展開を検討するうえで重要な資料となる。

本県における松ノ木式の分布は、先に挙げた宿毛貝塚・片粕遺跡の他にも三里遺跡・踊磬山遺跡<sup>(46)</sup>・庄司ヶ市遺跡<sup>(47)</sup>・川口遺跡<sup>(48)</sup>・山根遺跡<sup>(49)</sup>・永野遺跡<sup>(50)</sup>などから出土しており、わけても三里遺跡はこの段階に盛行期を見せている。三里遺跡では外面施文型の有文深鉢を伴い、石包丁状石器も出土している。これらの遺跡出土の類似土器については、宿毛式・平城式・彦崎Ⅰ式などと呼ばれて来たが、今後は南四国における成立期の縁帯文土器として位置付けなければならない。本県における縄文時代の遺跡は、西部を中心に中津式段階から増加しはじめるが、松ノ木式の段階は全県下のな広がりを持つことが予想され、遺跡の分布においても当該期は一つの画期をなすことが指摘できる。

次に土器組成について見ると、松ノ木式は有文深鉢・粗製深鉢・有文浅鉢・無文浅鉢・粗製

浅鉢・注口土器・双耳壺によって構成され、更に各器種ごとに多くのバリエーションが存在する。一般的に後期になると器種分化が認められると言われているが、先行する諸型式に比べても当該期のバリエーションの豊富さは極めて顕著な現象としなければならない。わけでも松ノ木遺跡は当該期の他の諸遺跡と比較した場合、特にバリエーションが豊富である。このことは遺跡の性格や土器出土空間の性格とも深い関係があるのかも知れない。有文深鉢の主要なものはⅢ～Ⅸ類からなっているが、これらを口縁部の特徴からまとめると、Ⅲ～Ⅵ類が上・内面施文型、Ⅶ類が施文省略型、Ⅷ・Ⅸ類が、外面施文型として把握することができる。上・内面施文型は83.8%、施文省略型2.1%、外面施文型5%であり、上・内面施文型が圧倒的に多く他2者は1割にも満たないが、当該期の土器様式を構成する型式として把握することができる。有文浅鉢・無文浅鉢の量的に保証された存在にも矧目しなければならない。両者は全体の中で23.4%を占めており当該期の諸遺跡例と比べても格段に高い比率を表している。たとえば小森岡遺跡では有文・無文の浅鉢をあわせても3.1%、今安楽寺遺跡では7.2%である。浅鉢の減少傾向を当該における土器組成の特徴とする見解もあるが、松ノ木遺跡からはそのような傾向は全く見出すことはできない再考を要する。Ⅲ類に代表される有文浅鉢は、先述したように各地の遺跡から少量出土しており当該期の土器組成の一つをなしているが、松ノ木遺跡のような集中的な出土例は特殊例に属し別の背景を考えなければならないのかも知れない。すなわち時期は中期末に遡るが、「日常使用されている土器の組成とは異なった」土器群か、「何らかの特別な活動を通じて撰択的に投棄された可能性もある。」<sup>(51)</sup>との指摘もあり、今後土器廃棄のあり方についての追求も必要である。

当該期にこれほどの高比率で浅鉢が存在する事実は、そして土器の組成が「その用途を通じてあらわれた事象によって〈人々の集団を規定し、特徴づけるもの〉として把握される。」<sup>(52)</sup>以上浅鉢の機能を高頻度に必要とする社会のあり方を反映したものとして理解しなければならない。すなわち食生活様式における大きな変化のあったことを意味し、これは後期社会の構造的な問題に関連する事象であり今後遺跡の立地や生業など多方面からの研究の必要性を提起するものである。

次いで成立期の縁帯文土器の編年的位置付け、及びその後の展開について触れなければならない。周知のごとくこの2つの問題については、近年多くの研究者による活発な論議が展開されており、その現状と課題については千葉氏の最近の論考に端的に整理されている<sup>(53)</sup>。従ってここでは主として後続型式との関係について所見を述べたいと思う。南四国における成立期の縁帯文土器である松ノ木式土器は、福田Ⅱ式あるいは宿毛式の変化から小松川式土器の段階を経て成立したものであり、近畿〈広瀬土壙40段階〉や山陰の布勢式及び東九州の小池原下層式にはほぼ併行関係を求めることができる。ただ〈広瀬土壙40段階〉から出土の関東系土器(堀之内Ⅰ式)と当遺跡出土の関東系土器(88 堀之内Ⅰ式)には時期差があり、(88)の方が古相を帯びているので若干の先後関係は認めなければならない。

成立期の縁帯文土器に後続する型式を考える時、議論の焦点は口縁部文様帯の上・内面施文型と外面施文型の存在とその後の展開のあり方についてであり、このことの理解と見通しの相違によって後続型式の編年序列が異なってくるのである。すなわち津雲A式→彦崎KⅠ式が津雲A式と彦崎KⅠ式の併存かである。筆者の結論を先に述べれば、両者は縁帯文土器という共通の要素をもちながら系譜を異にする相互に独立した別型式として共時的に存在し、地域と時間差によってその組成比率を異にしながら展開すると考える。前者の立場に立つ千葉氏は、上・内面施文型→外面施文型への変化を成立期の縁帯文土器→津雲A式・北白川上層式への変化として把握し、その変化の典型を山陰の土器の動向の中に見出し、「外面施文型口縁の獲得に関しては、連続的変遷が辿られる近畿北部・山陰東部の影響とみとめる必要がある。」<sup>(12)</sup>と結論している。しかし山陰からの影響によって近畿・瀬戸内・四国などの外面施文型の口縁部が成立するのであろうか。上・内面施文型→外面施文型の変化を地域的・極地的に生起する現象として否定するものではないが、多くの地域で内面施文型縁帯文土器が成立した段階に、すでに外面施文型縁帯文土器も成立している事実をどう解釈するのであろうか。一方西脇対名夫氏は、外面施文型の縁帯文土器が西方から普及するまでは、瀬戸内や近畿では「内側に折れ曲った口縁ばかりが有力だった。」<sup>(54)</sup>とする考え方も成立し難い。両者は成立期の段階ですでに共存しているのである。松ノ木式のⅢ～Ⅵ類とⅧ・Ⅸ類がそのことに対応し、洗谷貝塚Ⅸ類・森の宮Ⅴ群の中にも両者は存在し、松ノ木式に先行するとした小松川式の段階においてもすでに両者が見られる。更に外面施文型の段階である北白川上層式Ⅰ期や津雲A式それ自身の中にも少量ではあるが内面施文土器は存在している。このような事実を如何に理解すべきか。更にその後の展開にしても仏並遺跡71-O Dにおいて外面施文型30%に対して、上・内面施文型が7%、素縁（施文省略型）17%の比率で存在し、北白川上層式Ⅱ期以降の資料であるが淡輪遺跡においても両者共存している。また地域が異なるが中原遺跡<sup>(55)</sup>（鹿児島）においても高橋護氏が指摘するように上・内面施文型と外面施文型が共存している。このことは両者が時間的な先後関係にあるのではなく、ほぼ西日本の全域にわたって縁帯文土器様式を構成する主要な二者として位置付けることを可能とするものである。従って瀬戸内や近畿・四国においては、上・内面施文型は彦崎KⅠ式に、外面施文型は津雲A式へとつながり展開をなすのである。文京遺跡<sup>(55)</sup>や永井遺跡Ⅹ層<sup>(36)</sup>からは津雲A式が、樋ノ口遺跡<sup>(57)</sup>（香川）では彦崎KⅠ式がまとめて出土している。しかしこれらの出土状況が当該期の土器組成を十分に示しているものとは考えられない。以上、両型式の差は系譜に根ざしたものであることを述べたが、これで問題が解決した訳ではない。上・内面施文型は成立期の縁帯文土器の段階に至って始めて出現する型式であり、その口縁部文様・形態共に斉一的である。それに対して外面施文型の口縁は、先にも挙げたように口縁部文様帯と胴部文様帯が独立する以前、すなわち成立期の縁帯文土器以前の段階にすでに先行型式が存在している。いわば伝統的な型式と言うことができよう。このことは外面施文型の口縁部に現われた文様意匠が、上・内面施文型に比べると斉一性に欠け、地域色

が窺える点を指摘したい。すなわち北白川上層Ⅰ式に代表される近畿は重圈や弧文状の文様が多用され、九州や西南四国においては区画文が比較的によく用いられる傾向がある。このような観点からこれまで津雲A式、あるいは北白川上層式Ⅰ期として呼称されてきた外面施文型口縁部の発達の諸段階について、各地域での検討が必要である。このことは前章で触れた胴部文様の展開とも連動したものであろう。田中良之氏は頸胴部文様について「強い地域性を持っていた可能性」<sup>(58)</sup>を指摘している。田中氏の示した縁帯文土器の編年観とは見解を異にするものであるが、斉一性と在来性との統一的な把握は重要な視点であり、上・内面施文型に示された斉一性的な側面と外面施文型に現われた伝統的・在地的な要素を有する展開が、縁帯文土器段階の特徴でありその両側面が、西日本のほぼ全域に分布を拡大する要因ともなったのである。

最後に関東との関係について触れたい。縁帯文土器の成立には、福田KⅡ式に由来する伝統と共に関東系の土器の影響があったとする見解は多くの研究者の指摘するところであり、その根拠として「集線文系の文様群」・「多重半円文」などの集合沈線が関東起源であるとする考え方である。このことについても前章で述べたように堀之内Ⅰ式に集合沈線が盛行する時期は西日本で成立期の縁帯文土器が出現する時期よりも後出であり、関東の影響によって成立したとは考え難い。集合沈線が西日本東部に集中することは事実であり、当地域の伝統に生起した文様と考えたい。頸部無文帯の創出も関東と連動した動きであり関東が発信源であるとは確定できない。西日本からの影響である可能性も多分に残されている。中期末から後期初めに東日本から数多くの物質的・精神的文化の流入があったことは事実であり、東日本文化複合体の強い影響を受けたことは否めない。しかしながら中津式に始まった粗製深鉢や当該期に認められる浅鉢の増加などに現われた著しい器種分化、また新しい生産用具である打製石包丁の普及などにみられる変化は、西日本縄文後期社会の中で発現したものであり東日本文化複合体の西進によって生起したものではない。西日本のこのような新しい動き、あるいは「西日本文化複合体」のもつ積極性を歴史的な発展段階を示すものとして評価したい。松ノ木式土器＝成立期の縁帯文土器は、まさにこのような後期社会の中で一時期を画する様式として登場したものである。